

氏 名	さとう まきこ 佐藤 牧子
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 の 番 号	乙第 68 号
学位授与年月日	平成 28 年 7 月 26 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文の題目	ヴァージニア・ウルフの唯美主義 —ウォルター・ペイターとロジャー・フライの 唯美主義と比較して—
論 文 審 査 委 員	主 査 玉井 暲 副 査 前原 澄子 副 査 富永 英夫 副 査 米本 弘一

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の主旨は、ペイターとフライの唯美主義と対照させながら、ウルフの唯美主義がどのように作品に表れているのか、どのように展開していったのかその動向に光を当てた。第 1 章では、この 3 人の唯美主義の根底には「人間を超越した神聖な存在との交わり」があることを論証したが、3 人ともこの「人間を超越した神聖な存在との交わり」が本来人間にとって不可欠なものであり、人間をより充足した生活へと導く鍵であることに気がついていったといえる。「美学論」でフライは「人間を超越した神聖な存在との交わり」を感知する感覚を「ヴィジョンを捉える感覚」(sense of vision)と呼んだが、ウルフも「人間を超越した神聖な存在との交わり」を「ヴィジョン」と呼び、ペイターの描いたダ・ヴィンチに「ヴィジョン」を見る。幼少時代に「人間を超越した神聖な存在との交わり」を経験し、その経験が人間の人生にとって多大な影響力を及ぼすことを実感していたウルフにとって、捉えた「ヴィジョン」を言語化することが一つの人生における目標であったといえるであろう。ゆえに、それを実現しているペイターを、理想的なエッセイストとして讃えたのである。

第 2 章では、ペイターの『マリウス』を取り上げたが、この小説が重要であるのは、これがマリウスと「人間を超越した神聖な存在との交わり」を描いたものであるからである。第 1 章で、フライがこの「人間を超越した神聖な存在との交わり」を唯美的な美を感知す

る基盤に置き、それを「宗教体験」を基盤とした「想像上の生活」と呼んだことに触れた。フライはここで、この「宗教体験」を基盤とした「想像上の生活」とは宗教体験を通じて、我々が本来持つ霊的な能力を訓練し、高める生活であるとし、このように霊的能力を鍛錬する生活を続ければ、その人が到達する「想像上の生活」は「この世で私たちの知るいかなる生活よりもよりリアルであり、より重要性のある存在と呼応したもの」となる可能性があることを示唆している。フライがここで説明する「宗教体験」を基盤とした「想像上の生活」を続けた人物を描いたのがペイターの『マリウス』であるといえるであろう。マリウスは霊的能力を鍛錬し続け、その途上で自分の内側に住む聖なる存在（キリスト）に気がつき、その内なる聖なる存在の要求に応える生活をするに残りの生涯を捧げる。本論では、カントの批判哲学を用いてこれを説明したが、カントの言葉にしたがえば、マリウスは、もっとも純粋な実践理性と合一するキリスト教に生きた人物として描かれているといえる。

さらに、ここで見落としてはならない点は、マリウスが自分の中に内在するキリストの存在に気がつくことにより、「自己の個性の硬く閉じた独房の壁」を打ち破ることに成功するという点である。『ルネサンス』の「結論」でペイターが展開したのは、「こうした硬い、宝石のような焔で絶えず燃えていること、このエクスタシーを維持すること、これこそが人生における成功ということにほかならない」(To burn always with this hard, gem-like flame, to maintain this ecstasy, is success in life) という言葉に象徴されるように、感受性を陶冶することによってのみ、人生に意味が与えられ、その目的が達成されるという主張である。伝統的・宗教的な価値観を持つ知識人から多くの反発と誤解を招いたこの主張を補強する意味もあって執筆された『マリウス』において、ペイターは上記の主張の持つ欠点をその「排他性」と「拒絶」に置いている。そして、それを矯正するものとして「それを補うより大きな体系」の必要性を説くのである。第3章の第4セクションにて、ペイターとフライの唯美主義の違いを、フライが「想像上の生活」というより大きな「精神的価値」の体系を提示しているのに対し、ペイターにはそれがない、という点を挙げたが、ペイターは『マリウス』の中では、「キリスト教」という枠組みを提示することによって、その欠陥を補っているといえるのである。

第3章では、ウルフのペイターの唯美主義の受容と、その後の展開を追った。第1セクションでは、ウルフが実在の人物（特に女性作家）について綴ったいくつかのエッセイを取り上げたが、ウルフがペイターの審美批評にしたがって、それらの人物の分析を進め、また、それらの人物のヴィジョンを言語化する際に、ペイターが用いた感覚に訴えかける文体を用いながら、彼らの本質に迫ろうと試みていることについて論じた。「私はクリスティーナ・ロセッティです」という1930年に発表されたエッセイでは、ペイターとは質の異なる感覚に訴えかける独自の文体を駆使しながら、ウルフはロセッティの本質に迫ろうとしている。このようにして、ウルフはペイターを踏襲しながら独自の道を開拓していったといえる。

一方で、ウルフはこの人物のヴィジョンを言語化する試みと同時に、伝記に対する考察も深めていった。そして、自分には、無名の人々（特に女性）に光を当て、世に残す役割があり、そのような使命を果たす際には、芸術家としては認められたが、美術批評家としては真剣に扱われなかったペイターの手法を用いるのは不適切である、と思い至るのである。その結果が如実に現れているのが、1940年に出版された「セリーナ・トリマー」である。ここでは、ペイターに特有の感覚に訴えかける詩的な言語の使用は一切無くなり、ある出来事や人物から受ける印象を分析する、というペイター的手法も拒絶されている。代わりに、「創造力に富む事実」を丁寧に積み重ねながら、堅固なトリマー像を立体的に描き出すことに成功している。

第3章の第2セクションから第4セクションにかけては、ウルフの「ヴィジョン」の小説の集大成ともいえる『波』を取り上げて、ウルフの「ヴィジョン」がどのようなものであり、それをどのように表現したのかについて論じた。

まず、第2セクションでは、ペイターのダ・ヴィンチ像と『波』の登場人物ルイを比較検討することによって、ウルフがペイターの描いたダ・ヴィンチ像に見た「ヴィジョン」とウルフ自身が『波』を執筆することによって捉えようとした「ヴィジョン」を比較、分析した。その結果、ルイにはペイターの描いたダ・ヴィンチとその傑作である《モナ・リザ》、双方の「近代精神」が凝縮されていることを確認する事ができた。自然を観察すると同時に、植物と同化し、自分の根を世界中にはりめぐらしながら、古代から現代にいたるまで多くの経験や知識を吸収し続け、それらを自分の中でまとめあげようとする、という性格をルイに付与する事によって、ウルフはそれを可能にしている。しかし、様々な分野の人々が孤立することなく、互いの関心事を共有するという恵まれた時代に生きたダ・ヴィンチとは違い、自分一人の理性の力で、孤立した状態で完璧さを追い求めるルイの人生は、暗く、厳しいものとなっている。そのような、ルイの人生が、「輝き」(luster)を帯びるのは、作品全体を統括する役割を担うバーナードの手のひらの上で、人間とは何か、という認識を失い、水溜りに戻されるときである。そして、この「輝き」の瞬間に表現されているのがウルフの捉えた「生のヴィジョン」であるといえるのである。

ウルフは『波』の初稿を執筆後、日記に「これは私が見たあのヴィジョンの探求なのだ」と記したが、ウルフがここで記したウルフの「生のヴィジョン」とは、ウルフの言葉にしたがえば、人間の理性や感情から生み出されるものではなく、また、「現実の本質」(the essence of reality)を持つものでありながら、はっきりと実体を捉えるのは難しい、そのようなものである。このウルフの説明から、この「ヴィジョン」が「人間を超越した神聖な存在との交わり」から来たものであることが分かるが、そのような捉え難い存在を分析するのに一番適しているのはペイターの審美批評である。したがって、ウルフは『波』執筆の際にも、ペイターの審美批評にしたがって自分の受けた「ヴィジョン」の分析を行ったということが可能であるといえるであろう。

ところで、ウルフが『波』の執筆によって実体化しようとした「ヴィジョン」はウルフ

がペイターのダ・ヴィンチ論に見たダ・ヴィンチの「ヴィジョン」と同じものと言えるであろうか。第一章にて、ペイターのダ・ヴィンチ論には、自己に内在する霊的な能力を鍛錬することによって、神聖な存在と呼応する存在へと成長していくダ・ヴィンチの「人間を超越した神聖な存在との交わり」があることを確認したが、双方の「ヴィジョン」の基盤には、「人間を超越した神聖な存在との交わり」があるという点で、それらは質的には同じであるといえるであろう。あえて違いを挙げるとするならば、ウルフの『波』執筆の原動力となった「ヴィジョン」は、比較的短期間にウルフが経験した「人間を超越した神聖な存在との交わり」を指しており、それに対して、ウルフがペイターのダ・ヴィンチ論に見た「ヴィジョン」は長期にわたって続けられたダ・ヴィンチと「人間を超越した神聖な存在との交わり」を指している、とすることができるであろう。

第3セクションでは、ローダが創造する「変容した世界」とペイターの「唯美的な詩」に出てくる「変容した世界」の間にあると思われる相関関係を紐解きながら、ローダがペイターの唯美主義の持つ特質を多く有する人物として描かれていることを証明した。先に記したように、ペイターは『マリウス』において、『ルネサンス』の「結論」で主張した唯美主義の欠点を「排他性」と「拒絶」としているが、ローダの世界は「排他性」と「拒絶」に貫かれ、また、「個人の精神という狭い部屋」の中で完結している。『波』では、そのような特徴をもったローダは、自殺をする運命にあり、また、彼女が創造する「変容した」世界は、物語を統括する役割を担うバーナードによって、ほとんど草木も生えない不毛の地として描かれる（164）。これは、ウルフが感受性を陶冶することによってのみ、人生に意味が与えられ、その目的が達成される、というペイターの唯美主義に対して、否定的な見解をもっていたことを明示しているといえる。

第4セクションでは、フライの唯美主義とフォーマリズムの理論がどのように、バーナードの内面の成長を描く際に用いられているかについて論じた。フライの唯美主義の大筋は、ペイターの唯美主義を踏襲している。異なっているのは、先ほども触れたように、フライが「想像的な生活」というより大きな「精神的価値」の体系を提示しているのに対し、ペイターにはそれが無い、という点である。そして、もう一つの大きな違いは、ペイターが審美批評において、個々人に託した、芸術作品が与える印象を構成要素に戻す、という作業にフライが公式を与えたということである。つまり、芸術作品を観賞した時に、人間の心を深くから揺り動かす構成要素は「形式」(form)にある、と一般の人に普遍的に当てはまる公式をフライは提供するのである。この考えは後のフォーマリズム批評の基盤を確立し、後世に多大な影響を及ぼすこととなる。

ポスト印象主義の画家が追求した「実在する形態を限りなく暗示する凝縮体」(the condensation of the greatest possible suggestion of real form) つまり、我々の感性的な意識に訴えかけて、描き出された対象に内在する性質を含めた「実在性」を我々の内に喚起する形態。このような形態をフライは「生の等価物」(an equivalent for life) と呼んだが、作家として、「現実の本質」をもつ「ヴィジョン」を言語化する手段を模索し続けてき

たウルフにとって、ポスト印象主義の画家たちが試みた「生の等価物」を発見しようとする試みは、興味深いものだったにちがいない。

ペイターが「レオナルド・ダ・ヴィンチ」や『マリウス』で達成したような、霊的能力を鍛錬しながら成長する人間の「想像上の生活」を描くには、内面の成長を表す指標が必要である。「レオナルド・ダ・ヴィンチ」において、ペイターは、ダ・ヴィンチの絵画を用いて、それを表現することに成功し、『マリウス』では、キリスト教という大きな体系を用いることによってそれを表現することに成功したといえるであろう。ウルフにも、それを表現することを可能とする手段が必要であったわけだが、『波』では、フライのフォーマリズムの理論がその働きを果たしているといえるのである。

論文審査並びに最終試験の要旨

本論文は、イギリスの20世紀前半において活躍した女性小説家ヴァージニア・ウルフ（Virginia Woolf, 1882-1941）を取り上げ、ウルフの唯美主義（aestheticism）が彼女の先輩作家ウォルター・ペイター（Walter Pater, 1839-94）と同時代の美術批評家ロジャー・フライ（Roger Fry, 1866-1934）の唯美主義とどのような関係にあったのか、そしてウルフがそれらの相互関係を通してみずからの唯美主義をどのように発展させていったのかを検証し、ウルフ自身の唯美主義の特質を明らかにしようとした研究である。

本論文は、その全体が、目次、序論、第1章、2篇の論文からなる第2章、4篇の論文からなる第3章、結論、注、参考文献から構成されており、総ページ数はA4判用紙にて193ページ、400字詰め原稿用紙に換算しておよそ600枚からなる大部の論文である。

論者は、イギリス世紀末の文学界に現れた唯美主義について、唯美主義とはただ単に美への献身というだけでなく、美の重要性を信じるという新たな信念であって、人生および芸術についてのある観念を表す思想として捉える。この思想を信じ実践した作家としてウォルター・ペイターに注目し、その著『ルネサンス』（*The Renaissance*, 1873）において表明されている、美とはじかに経験され、血脈に感じられるものであって、それゆえ美とは、血の通わぬ抽象観念ではなく、文学や芸術や感覚の世界から享受するさまざまな印象を表す理念と考えるペイターの唯美主義を重視する。そしてこのペイターの思想を継承した小説家・批評家としてウルフを位置づけ、ウルフがペイターの唯美主義をいかに受入れ、それを発展・深化させ、その限界を克服・超越したのかを、本論文において明らかにしている。また、ペイターと同じく唯美主義の思想をもっていた批評家として、ウルフの同時代の美学者ロジャー・フライに注目し、その思想が反映されているフライの後期印象派論がウルフの唯美主義を確立するのに大きな影響を与えた事実を検証している。

第1章「ウォルター・ペイターとヴァージニア・ウルフを結びつけるもの——<人間を超越した神聖な存在との交わり>について」では、ウルフ、ペイター、フライの唯美主義の根底に、共通して、人間を超越した神聖な存在を想定する発想が横たわっていることを論証する。ウルフはこの存在との交感の経験をヴィジョンと呼び、このヴィジョンを言語化することが彼女の文学の目的であったと主張する。

第2章では、ペイターの代表作『マリウス』(*Marius the Epicurean*, 1885)を取り上げ、この作品を「人間の存在を超越した存在との交わり」を描いた小説として考察する。本章の第I論文『『享楽主義者マリウス』におけるペイターの挑戦——<近代精神に可能な宗教のいわゆる第四局面>とカントの批判哲学』において、主人公は、カント(Immanuel Kant, 1724-1804)のいう「実践理性」の最も純粋な形と合一するキリスト教に生きた人物として読解できることを明らかにする。第II論文『『享楽主義者マリウス』におけるキリスト教』では、ペイターが、その唯美主義が抱えていたと考えられる欠点である排他性と拒絶性を補うために、「より大きな体系」としてキリスト教という枠組みを設定することにより唯美主義を矯正した小説として、『マリウス』を解釈する。

第3章は、ウルフがペイターの唯美主義をいかに受容し、いかに発展させていったのかを検証する。本章の第I論文「芸術家か職人芸か——ウルフとペイターの伝記」では、ウルフが執筆した伝記的エッセイのうち、初期のものではペイターの感覚に訴えるスタイルを踏襲したが、後期の伝記になると、独自の道を開拓し、たとえば「セリーナ・トリマー」(‘Selina Trimmer,’ 1940)では、ペイター離れを起こし、「創造力に富む事実」の積み重ねによる伝記スタイルを確立したと主張する。

本章の第II~IV論文では、ウルフの「ヴィジョン」小説の集大成ともいえる『波』(*The Waves*, 1931)において、ウルフの「ヴィジョン」とはいかなるものか、それをいかに表現したのか、そのありようを具体的に分析する。第II論文「二つの肖像——ペイターのレオナルド・ダ・ヴィンチ像とウルフの『波』におけるルイ像について」では、この小説の6人の登場人物の中の一人であるルイには、ペイターの「モナ・リザ」と同じく、古代からの数多の経験と知を1個の存在において凝縮しているようなありようの「近代精神」を表象する姿が描かれていると主張する。第III論文「ウルフのウォルター・ペイターに対する見方——『波』のローダとその変容した世界」では、ウルフの登場人物の一人ローダは、ペイターが描く唯美主義的特質を帯びた登場人物によく似ていて、排他性と拒絶性に貫かれた世界に生き、個人の精神という狭い部屋の中で完結している人物だと解釈できると述べる。第IV論文『『波』のバーナードにみる唯美主義——ウォルター・ペイターからロジャー・フライへ』では、主人公の一人バーナードの内面的成長がフライの唯美主義とフォーマリズムに基づいていかに構築されているかを明らかにし、フライの主張する「生の等価物」の思想がウルフに深い影響を与えたと述べる。

結論として、唯美主義においては、より完全な生や精神的成長を描くのに、ペイターがレオナルド・ダ・ヴィンチ論においてはその絵画作品を、『マリウス』においてはキリスト

教という大きな体系を用いたように、ウルフの『波』にあっては、フライのフォーマリズム理論がその機能を果たしたのであると主張する。

本研究は、イギリスの20世紀モダニズム文学を代表する女性小説家ヴァージニア・ウルフを取り上げ、その文学の中心的なテーマであると想定される「人間存在についての認識」、すなわち「生のヴィジョン」は、「唯美主義」によって表されていると見なし、このウルフの唯美主義の特質を明らかにしようとした、斬新な視点からのウルフ文学研究である。ウルフの唯美主義の根底に、さらには理想の唯美主義の中に、美の単なる感覚的な享受を超越して、人間存在を超えた神聖なるものを求めるヴィジョンが横たわっている事実をテキストの具体的な分析と考察を通して明らかにしたのは、本論文の大きな功績である。

論者は、ウルフの唯美主義の特質を明らかにするために、ウォルター・ペイターとロジャー・フライの唯美主義と比較し、相互の影響関係のみならず、共通点と相違点を鮮やかに分析することに成功した。特に、ウルフ文学に対するペイターの影響については、従来の研究では断片的に言及されることはあったにしても、本論文のように、ペイターの『ルネサンス』や『マリウス』とウルフの伝記的エッセイや『波』を取り上げ、両者のテキストを具体的に比較検討した本格的な研究はほとんど見られないだけに、極めて重要な研究である。また、ウルフの唯美主義がフライの後期印象派論やフォーマリズムと親密な関係にあることを明らかにした点も注目すべきである。さらに、『マリウス』論と『波』論は、独立した作品論としても優れたものである。最近の伝記的文学（life-writing）の研究の視点から見ると、ウルフの伝記的作品に独自のスタイルを開拓した面を明らかにしているのも興味深い。

ただし、本論文において問題点がないわけではない。本研究は、ウルフ文学を大きな文学的功績を残したペイターとフライとの関わりにおいて考察する研究であるゆえ、広範な研究範囲を視野に入れねばならない必然からやむを得ないにしても、議論が幾らか拡散する側面が残ったのは残念である。フライとカントについての論考にはより一層詳細な考察も求められよう。

しかし、これらの点は本論文の本質的な価値を損なうものではない。

本論文によって、ヴァージニア・ウルフの唯美主義の特質をイギリス19世紀末文学から20世紀モダニズム文学にかけての大きな文学史的文脈のなかで明らかにすることができたのは、英文学研究界への大きな貢献である。よって、本論文を、博士（文学）の学位を授与するに値する論文として判定する。

（平成28年5月12日）